

みちのり

昌谷範茂さん（1939年鹿児島奄美大島生まれ）シリーズ④

帰国して一番つらかったのは、家族を連れて中国に帰れといわれたこと

1941年、昌谷さんが2歳の時、両親、兄二人、姉三人と共に、奄美大島から三江省方正県伊漢通の開拓団に入り、後に妹が生まれました。44年6月、5歳の時、実父と長兄は軍隊に召集され、敗戦後はシベリアに抑留された。その年、妹が亡くなった。46年秋ごろ、母と姉二人、次兄とで新立屯の養牛場で働いていたが、満足に食べられなかったため、母は、昌谷さんを養子に出した。

養父母に引き取られて昌谷さんは、中国語を話すようになり、次第に日本語を忘れていった。10歳で小学校に入学した。この年、他の子どもたちを連れて中国人と再婚していた母は、先妻の息子夫婦と折り合いが悪く自殺した。三人の姉たちはそれぞれ中国で結婚したが、寒さと貧しい医療状況の中、20代で次々に亡くなった。次兄は養子になったがその生活は



昌谷範茂さんと妻の桂子さん、尼崎市中央公民館前で。

苦しく、朝早くから何十頭もの牛の世話に追われ、それが終わると家の手伝いをする毎日で、学校に通えなかった。昌谷さんは小学校卒業後、2年間は家業の農漁業を手伝った。19歳の時、醸造工場に就職し、日本に帰国するまで18年間働いた。73年頃、次兄が「日本へ帰りたい」と思っ調べてもらったところ本籍などの身元が判明した。長兄がシベリアから帰還して尼崎にいることも分かった。76年8月、次兄が長兄を頼って帰国した。昌谷さんも帰りたいと思っ

身元が判明 73年頃、次兄が「日本へ帰りたい」と思っ調べてもらったところ本籍などの身元が判明した。長兄がシベリアから帰還して尼崎にいることも分かった。76年8月、次兄が長兄を頼って帰国した。昌谷さんも帰りたいと思っ

し、定年退職するまで20年間働いた。妻は、長男を自転車に乗せ、週2回通院させた。次女が小学校に入学してからパートで定年まで働いた。子どもたちは今、それぞれ家庭を持ち、孫は12人いる。国家賠償請求訴訟に参加

昌谷さんは帰国後働いた期間が短いため、わずかな年金での生活に不安が募り、裁判に加わった。その時、帰国して一番辛かったことは日本人とトラブルになった時に「家族を連れて中国へ帰れ」と言われたことと訴えていた。

06年の神戸地裁で勝訴した時は、「人権と尊厳が回復される」と喜んだ。08年から中国残留邦人支援策が始まり、尼崎日本語教室ができた。開設当初から夫婦で通い、楽しく日本語を学んでいる。

頑張る二世たち 1979年に日本へ 昨年9月からパラグループで学習している石井一郎さんは、79年12月に両親と3人で日本へ来ました。尼崎市に住



スタッフといっしょに新聞を読む石井一郎さん

母の介護に 母の介護に 母の介護に

母の介護に 母の介護に 母の介護に

今年も交通公園にお花見に行きました。毎週火・金曜日は母親がデイサービスに行く日なので、石井さんは火曜日を利用して日本語教室に来ることにしました。

努力を怠らず 日本での生活を振り返って石井さんは「日本の社会で生きていくために、自分から日本人の中に飛び込んで、言葉も必死に勉強したし、人間関係の構築にも努力しました。命があつて元気でさえいれば、どんなことでも頑張れます」と言います。石井さんの介護のお陰で母親は少しずつ体調を取り戻し、食欲も出てきました。母親が元気になったら、英語の勉強もしてみたいと、ますます意欲を燃やしていました。

交流の広場



尼崎市中央公民館で記念撮影

一昨年の11月に和歌山県有田市へみかん狩りに出かけた時に交流して以来の出会いです。久しぶりに再会した帰国者たちはお互いに懐かしそうに話が弾んでいました。来訪者の中には何組か一世、二世、三世のファミリーも参加されており、2〜3歳の可愛い孫たちが楽しそうにはしゃいでいるのが印象的でした。また、交流会に何軒さん（琵琶）、劉志麗さん（二胡）の演奏が花を添えました。（田村 博志）

主な行事	
1月19日	新年交流会
26日	手芸教室
2月5日	和歌山県帰国者との交流会
10日	絵画教室
3月16日	生け花教室
26日	学習発表会
4月14日	料理教室

楽しかった新年交流会

和食の寿司で会食を楽しみました。そして大阪の帰国者楽団「楽友会」の演奏で中国の歌、日本の歌を合唱し、最後はみんなで「ヤンガー」を踊って、新しい年を祝いました。



たくさん料理を作りました。



「ヤンガー」を踊る参加者

手芸教室



駒木陽子さん、宮下英子さん、下平淑子さん

アーティスト??集合

絵画教室



履いて来た自分の靴を描く重光孝昭さん

講師に杉本多英子先生を迎えて初めての絵画教室を開催しました。

講師に杉本多英子先生を迎えて初めての絵画教室を開催しました。



完成した小物入れ

今回のモチーフは「自分の靴を描く」でした。鉛筆だけを使い、色をイメージし、光と影を良く見て、濃淡で表現する難しさに、途中で投げ出したくなった人もあったかもしれない。先生が少し手を入れると、見えるほど良くなり、「ほめられると伸びるタイプなんです」という声や、「ためたなあ」というほやきも聞こえました。全員の力作を学習発表会に展示しました。

和歌山県の帰国者が友好訪問 2月5日、和歌山県帰国者の皆さん50名が神戸花鳥園観光の途中に、コスモスの会を友好訪問されました。この日私たちは、尼崎市中央公民館において昼食懇談を通して交流会を開催しました。尼崎市足田福祉事務所長の歓迎のあいさつのもと、コスモスの会を代表して川上さんが日本語と中国語で歓迎の言葉を述べ